

新学長就任挨拶

2016年9月1日、専修大学第17代学長に選任された佐々木重人学長。矢野建一前学長の急逝を受け、7月の理事会で就任が決定した。「故矢野学長の遺志を受け継いで創立140年に向けて歩みを進める」という佐々木学長に目標を語っていただいた。

前学長の衣鉢を継ぎ140周年成功を目指す 次世代と連携し21世紀ビジョンを実現する



専修大学長 佐々木 重人

ささき しげと ●1955年東京都杉並区生まれ。61歳。78年商学部会計学科卒業。83年専修大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得満期退学。88年専修大学商学部助教授。95年より教授、2013年より商学部長。2011年～13年税理士試験委員。学校法人専修大学理事、評議員。博士(経営学)神戸大学。専攻は会計史。

座右の銘は「実るほど頭を垂れる稲穂かな」。学生時代より、自分に対しての心構えとして、持ち続けている。学長としても周囲の声に耳を傾けて、職務に邁進するという。

今年の8月末まで商学部長を務めておりました。それ以前より一般教員のかたわら、学内の様々な役職に就かせていただき、多くの経験をしてまいりました。たとえば、教務委員長は合計で4回務めました。また国際交流センターにて委員会の委員を引き受け、就職指導委員会委員、学生部委員など、学内の様々な部署に携わる経験が多かったです。

そのような経験を通じ、矢野先生が学部長会でリーダーシップを取っていらっしゃる姿を間近に見る機会があったことは幸いでした。学長職について、まさか自分が就任とは想定していませんでしたが、矢野前学長をはじめ、先輩方がどのように取り組んで来られたか見てまいりましたので、今回の学長という重責ある職務についても自然体でお引き受けすることができたと感じています。またお引き受けするから



著書に「近代イギリス鉄道会計史」(国元書房 3,100円+税)がある。大学院時代に恩師である故・小澤康人教授(写真上・左)の言葉により執筆を決意し、約20年をかけて2010年に上梓。平成23年度日本会計史学会賞受賞。

大学の入学祝いにお父さんに買ってもらったという「会計発達史(リトルトン著)」を手に。以来、40年以上の愛読書である。

には矢野先生のご遺志を継ぐ、という武者震いのような感覚を持っております。

私の任期は1期3年であり、本来ならこの時期も矢野先生がやっていたで



あろう学長職です。こういった経緯もあり、矢野先生が掲げてらした創立140周年の基本プランを実現すること、それを私の当面の目標としています。3年という短い期間ですが、矢野先生

の墓前で恥ずかしくないご報告ができれば良いと感じております。それが私なりの目標であり、抱負とするところです。

また、もうひとつ、学長職は非常に厳しいものであると認識しています。助けていただける方はたくさんいらっしゃるわけですから、学部長やそれを支えるスタッフのみなさんとも連携を取り、目標に邁進していくというのが私の目指すところです。

実務の面では授業数を軽減していただきましたが、授業のためには研究が必要なわけで、なかなかそのための時間が取れないということを実感しています。学問はやらないと退化しますので、車でいえばアイドリングの状態をなんとか維持していきたいと考えております。このアイドリングの一例として、学内での研究活動があります。たとえばフランス革命のベルンシュタ

イン文庫の研究があります。この研究に積極的に取り組んでいる先生から依頼があり、私の専門に引きつけてフランス革命や19世紀の事情を担当してくれないか、と頼まれました。研究分野としては異なりますが、アイドリングをする必要があるの、内容は拙いかもしれませんが自分にムチ打つべきだろうと、お引き受けした次第です。しかしながら、歴史研究は膨大な時間を要します。10月の下旬には研究発表がありますので、車中や喫茶店で常に研究するようにしています。

矢野先生が140周年に向けて掲げた3つの柱があります。1つ目の柱が国際系新学部を創設、2つ目が商学部の神田移設、3つ目に文学部ジャーナリズム学科の改組設置を掲げ、実現に向けて邁進していらっしゃいました。私の任期はそれらの実現に使い、140周



校友の皆さんへ「これまで物心両面でのご支援をお願いするなど、とても頼りにしております。今後、大学と卒業生の距離が近くなる施策の実現を目指します。これからもサポーターとして応援をお願いいたします」。

年を必ず成功させる所存であります。これらが成功すると生田キャンパスの充実も見えてきます。「140周年」がひとつの起爆剤となり、専修大学全体に良い波をつくっていただければ良いと感じています。145年、150年に向けて次の世代とも連携を取りながら、改革を進めていきたいと感じています。

いま、各大学では少子化により入学者が減少する「2018年問題」が懸念されています。そのためにも大学のブランディングが必要と言われますが、ブランド価値は学生が決めるものです。私はそれぞれの学部が工夫し続けることが受験生への訴求に繋がるのだと考えています。21世紀ビジョンである「社会知性の開発」には、社会、地域への貢献や還元を考えられる“グローバル(Glocal)”という目標が込められています。そのためにどのような教育をすべきか、必死に考えて実践していくことが専修大学のブランドをつくり上げていくのではないのでしょうか。また、「私たちは、こういう目標を持っている大学なのだ」と広報を通じ、専修大学を理解してもらおう機会をもっとつくっていくべきだと思っています。(談)

(9月14日(水) 学長室にて)



8月10日、広島・マツダスタジアムにて黒田投手に200勝達成の刻印が入った専大メモリアルリングを贈呈。「黒田投手は、専修大学卒業生として理想的な人生を歩んでいらっしゃる」と佐々木新学長は讃える。(写真提供：デイリースポーツ)